

コリント第二6章1-16節 「広く開かれた心」

1A 無駄にしない恵み 1-2

2A 神のしもべの推薦 3-10

1B 苦しみの中での忍耐 3-5

2B 聖霊による品性 6-7

3B 二つの批評 8-10

3A 子供のような心 11-13

4A 世との調和 14-16

本文

今朝は、コリント人への手紙第二 6 章 1-16 節を読んでいきたいと思います。私たちが、カルバリーチャペル日本カンファレンスで、「神の栄光」という主題でコリント第二 3-4 章を学びましたが、今朝は、コリント人への手紙第二全体の中にあるテーマに焦点を当てたいと思います。それが、6 章 13 節にある言葉でしょう、「私たちと同じように、あなたがたも心を広くしてください。」です。パウロが示した愛情に対して、あなたがたも成長して愛をもって、信頼して心を開いてくださいというお願いです。

パウロの宣教旅行の中で、長いこと滞在していた教会が二箇所あることに気づきます。一つは、コリントです。第二次宣教旅行の時、逃げるようにして各地を点々として宣教した彼ですが、ついにコリントにおいて落ち着いて教えることができました。「一年六か月の間腰を据えて、彼らの間で神のことばを教え続けた。(使徒 18:11)」とあります。もう一つは、第三次宣教旅行の時のエペソです。「二年も続いたので、アジアの住む人々はみな、ユダヤ人もギリシア人も主のことばを聞いた。(19:10)」とあります。(20:31 には三年教えていたことが記されています。)ですから、エペソにおいても、コリントにおいても、パウロたちは特別な思いがありました。愛情を注ぎ込みました。けれども、愛の原則というのは、必ずしも結果を出すようなものではありません。愛を注げば、それだけ相手が愛し、敬ってくれるかということ必ずしもそうではないですね。イスラエルの民が典型例です。神はイスラエルを愛し慕い、イスラエルが神の民としてこの方を敬って生きるための備えを、考え得る限りのことをされました。ところが、彼らからかえってきたものは、意図的な背徳、神に背を向けて偶像礼拝に陥ったことでした。

そこで、エペソについてですが、パウロは、涙を流しながら苦難の中で、教え続けたにも関わらず、教会の中から偽教師が現れて、自分たちのほうに引き付け、教会が荒らされてしまうことを預言しました。そしてコリントにおいては、私たちが手にしている第一の手紙と第二の手紙に書かれている通りです。多くの問題が出て来ました。そして、偽使徒や偽教師がやって来て、パウロの評

判を引き下げて、そのパン種が広がってしまい、パウロに対する教会の人たちの信頼が揺らいでしまったのです。

私が好んで見るショート・ビデオのシリーズがあります。フェイスブックですが、イスラエル国籍のアラブ人の若者による「ナス・デイリー」というものです。世界中を旅行して、一分で収めるビデオをこまめにアップしています。その中に日本への旅行があります。彼は、母からも日本がいかに優れた国かを教えられていたそうです。そして案の定、日本がいかに優れたところか、美しいところかを確認したそうです。しかし彼は、「日本はほぼ完璧な国だ」と言いました。「ほぼ」と付けたのです。そして、彼は日本が先進国で最も自殺率が高い国であることを紹介し、それを自殺で有名になってしまった、富士山麓の樹海から撮影していました。¹

つまり、ほとんどすべてのものが整えられており、何ら不自由がないように見えるような環境であっても、いろいろ恵まれているからこそ、心が窮屈になり、かえってその恵みを受けないで心を閉ざしてしまうということがある、ということです。同じように、パウロたちによって手厚く世話を受けた教会が、その恵まれた状態に満足できず、かえって反発してしまっていたのです。パウロのコリント人への第二の手紙は、改めて自分に与えられている神からの務めを説明し、弁明しています。彼らの背後には、エルサレムの大使徒からの推薦があると主張する、偽使徒や偽教師がいますから、なおさらのことそのことが必要になりました。

1A 無駄にしない恵み 1-2

1 私たちは神とともに働く者として、あなたがたに勧めます。神の恵みを無駄に受けないようにしてください。2 神は言われます。「恵みの時に、わたしはあなたに答え、救いの日に、あなたを助ける。」見よ、今は恵みの時、今は救いの日です。

パウロたちは、自分たちのことを「神とともに働く者」と言っています。パウロはこの前に、5章にて和解の働きを話していました。神がその恵みによって、私たちとキリストにあって和解して下さったことを話しています。19節に、「神はキリストにあって、この世をご自分と和解させ、背きの責任を人々に負わせず、和解のことばを私たちに委ねられました。」と言っています。私たちが罪ある者なのに、キリストが代わりに罪人と同じようになられて、そしてイエス様こそが正しい方なのに、私たちが正しい者として神の前に立つことができるようにして下さったということです。私たちが一方的に神に敵対していたのに、神は敵対することなく、キリストにあって和解して下さいました。私たちはしばしば間違ってしまうのですが、神は基本的に怒っておられて、私たちが一生懸命、悔い改めて、罪を犯さないように努力しなければ、その怒りを宥めることができないと感じています。ですから、心を狭くしています。窮屈にしています。神はすでにその怒りをキリストに置かれて、それゆえに心は私たちに大きく開かれているのです。その開かれている心を、私たちが受け入れる

¹ <https://www.facebook.com/nasdaily/videos/892645350887618/>

ことが必要です。

このことを話した後で、「神の恵みを無駄に受けないようにしてください。」と言っているのです。何をもって神の恵みを無駄にしているのでしょうか？そうです、神の和解を受け入れて、神のその素晴らしい恵みに浸り、神の恵みに酔いしれるべきなのに、何か自分には足りないと思ひ、それを自分の努力によって埋めて行こうとしていくことです。すでに恵みが十分にあるのに、自分を強くしていこうとして、我を張っていることによって、恵みが流れてなくなり、愛の流れが止まってしまっているということです。偽教師らは巧妙です。私たちは当然、完成されているわけではないですから、欠点があります。そこに付け入ります。「だから言っただろう。パウロの言っている恵みの福音とやらは、あなたがたを完全にさせることができないのだ。キリストが十字架にかかってくださった、というだけでは足りないのだ。あなたの頑張りが必要なのだよ。」と言うのです。けれども、これは偽物です。自分の力を働かせればそれだけ、肉が働きます。それをいかに表向ききれいに見えても、肉ですからそこにはあらゆる、悪い思いが出てきます。これが、律法主義の罠です。

そしてパウロは、イザヤ書から引用して、「恵みの時に、わたしはあなたに答え、救いの日に、あなたを助ける。」と言っています。そしてパウロは、「今は恵みの時、今は救いの日」と言っているのです。イザヤの時代には、恵みと救いの日が将来のことでしたが、キリストが来られたのだから、い今が恵みの時、今が救いの日だと言っています。つまり、私たちのキリスト者としての主な焦点は、神の恵みによる救いだということです。主が、確実に私たちの中で、私たちを通して神の恵みによる救いの働きを行なってくださいということ。私たちの生活にいろいろな試練が来るでしょう。困難が襲って来るでしょう。また、楽しいこともやってくるかもしれません。けれども、絶えず心に留めていなければいけないのは、神はどんな時でも、ご自分がお救いになりたい人がいるということです。その人を、私たちの教会に送ってくださいかもしれません。そして、私たちが出て行って、その人に出会わせてくださるかもしれません。このことに情熱を持たず、関心が他のことに移っているのであれば、私たちは神の時というものを見失っているといっても過言ではありません。

2A 神のしもべの推薦 3-10

1B 苦しみの中での忍耐 3-5

3 私たちは、この務めがそしられないように、どんなことにおいても決してつまずきを与えず、4 むしろ、あらゆることにおいて、自分を神のしもべとして推薦しています。すなわち、苦難にも苦悩にも困難にも、5 むち打ちにも入獄にも騒乱にも、疲れ果てた時も眠れない時も食べられない時も、大いなる忍耐を働かせて、

パウロたちは、神の恵みによる救いについて、自分たち自身がその妨げにならぬよう、最新の注意を払いました。それが、「この務めがそしられないように、どんなことにおいても決してつまずきを与えず」という意味です。そして、「あらゆることにおいて、自分を神のしもべとして推薦してい

ます」と言っていますが、カンファレンスでのメッセージを思い出せるでしょうか。3 章の初めに、リック・バーネット牧師が「3:2 私たちの推薦状はあなたがたです。それは私たちの心に書き記されていて、すべての人に知られ、また読まれています。」と話しました。偽使徒たちは、文字に書かれた推薦状を持ってきていました。けれども、パウロたちはそのような書面はありません。けれども、一年以上も付き合っていて、パウロたちを通して、御霊による新生体験をして、また御言葉によって養われていたその間柄です。推薦状なんて何の意味があるでしょうか？御霊によって心の板に書き記されている推薦状こそが、まことの推薦であり、人々が御霊によって変えられているということ自体が、彼らが確かに神のしもべであることの推薦状なのだとパウロは話しました。

パウロたちが、どのようにして本物の神のしもべであるかについて、三つの段階で話しています。一つ目は、「困難な中にあっても、信仰によって、忍耐を働かせる」ということです。4 節、5 節において前置詞があります。「～にも」とありますね。「苦難にも苦悩にも困難にも、5 むち打ちにも入獄にも騒乱にも、疲れ果てた時も眠れない時も食べられない時も」とあります。そのような状況の中にも、それでも主がおられることを彼らは信じました。信仰を積極的に働かせるのですが、主がここにはおられないと感じてしまう中にあっても、「それでも主が働いておられる」と信じます。自分は理解ができません、はるかに理解を超えています。けれども、主は何かご自分のことを行われている最中であることは、確かなのです。それを信じて受け入れる時に、御霊によって忍耐する思いと心が与えられます。(参照:ヤコブ 1:2-4)

2B 聖霊による品性 6-7

6 また、純潔と知識、寛容と親切、聖霊と偽りのない愛、7 真理のことばと神の力により、また左右の手にある義の武器によって、

本物のしもべであることの第二段階は、「内から出て来る実」と呼んだらよいでしょうか。内実がどうなっているのか、その神のしもべが本物かどうかを測る、ものさしになります。「純潔と知識」というのは、パウロが 4 章 2 節で話しているように、「恥となるような悪賢い隠し事」との反対のことです。道徳的に聖いということです。そして、「寛容と親切」であります。たとえ問題がある人がいても、それでもキリストにあって耐え忍んでいることが寛容であり、また親切です。そして、「聖霊と偽りのない愛」とあります。聖霊の力によって、すべてこれらの内実が現れます。偽りのない愛というのは、表面的なものではないということ、また聖い愛であり、行いのともなった愛です。「真理のことばと神の力」とあります。神の言葉に混ぜ物をしません、真理を語ります。そして、御霊によって神の力が現れます。

そして最後に、「また左右の手にある義の武器によって」とあります。これは戦っている姿を表しています。右の手にも、左の手にも武器をもって戦っています。ギリシアやローマの戦いにおいて、剣を一振りだけではなく、複数の剣または槍を手にはしています。武器をすべて取り上げて、戦って

いる姿です。コリント第二 4 章 8-9 節に、その戦っている姿がありましたね。剣闘士は、倒れてしまっても、実は滅んでいない。そうこうしているうちに、相手が倒れてしまった、ということです。そしてパウロは、これを明確に「義の武器」と呼んでいます。誠実の武器と言ってもよいでしょう。その反面、偽使徒や偽教師は、見かけの雄弁さがあり、見せかけの霊性がありました。しかし内実は正反対のものでした。11 章 20 節に、「実際あなたがたは、だれかに奴隷にされたり、食い尽くされても、強奪されても、いばられても、顔をたたかかれても、我慢しています。」とあります。カルト化した教会で起こっているようなことが、起こっていたのです。こんな仕打ちを受けているのに、それでも気づかず、パウロの悪評をしている者たちもいたのです。

3B 二つの批評 8-10

8 また、ほめられたりそしられたり、悪評を受けたり好評を博したりすることによって、自分を神のしもべとして推薦しているのです。私たちは人をだます者のように見えても、真実であり、9 人に知られていないようでも、よく知られており、死にかけているようでも、見よ、生きており、懲らしめられているようでも、殺されておらず、10 悲しんでいるようでも、いつも喜んでおり、貧しいようでも、多くの人を富ませ、何も持っていないようでも、すべてのものを持っています。

私たちは、4 章 7 節で、キリストに関わる福音の光が、土の器の宝の中に隠されていることを読みました。あまりにもすぐれた力が、あまりにも脆い、すぐに壊れてしまうような人間の器の中に置かれているのです。そして、それが神の御心でした。したがって、人間的な標準では、それは惨めに見えたでしょう。弱いと見えたでしょう。愚かだと見えたでしょう。いろいろな評価を下すことができます。ところが、実は、その弱々しく見える姿のところに、神の命の働きがあることを確認します。しかし、コリントには、その人間的な判断でパウロを評価していた人々がいました。パウロは騙す者だ、パウロは人に隠れて物事を行なっている、彼は死にかけている、懲らしめられている、彼は悲しみに満ちている、貧しいなど、いろいろな評価を下していました。

けれども、同じパウロなのに、その正反対の評価をしている人々もいたのです。彼が真実に生きている、彼は公正明大に生きている、彼は奇跡的に生きている、殺されていない、喜びに満ちた人だ、そして多くの人を富ませている。さらに、何も持っていないようでも、実は全てを持っているのです。同じ人なのに、これだけ意見が変わります。それは、パウロが七色変化しているのではなく、パウロは何も変わらずに神に仕えているのです。変わっているのは、その人たちの心なのです。その本人が、神との関係で心が離れていっていると、同じ人を見ているのに、その見方が神からのものではなく、肉からのもの、人間的なものに変わってしまいます。そして、これは、キリストのしもべに対して如実に表れます。なぜなら、キリストご自身が同じように正反対の評価を受け、その方に仕えているからです。そこで、パウロが次の懇願をします。

3A 子供のような心 11-13

11 コリントの人たち、私たちはあなたがたに対して率直に話しました。私たちの心は広く開かれています。12 あなたがたに対する私たちの愛の心は、狭くなってはいません。むしろ、あなたがたの思いの中で狭くなっているのです。13 私は子どもたちに語るように言います。私たちと同じように、あなたがたも心を広くしてください。

「率直に話しました」とパウロは言っています。これは、愛と信頼の関係がなければできないことです。自分のことを包み隠さず明らかにしています。透明になっています。主の前で自分がどのようなものなのかを、そのまま話しました。このことは、誤解を生むリスクがあります。けれども、相手と同じように心を開いて、愛をもって応答するのであれば、そこにはこれまでにない、深い愛の結びつきで結ばれるようになります。

コリント第二の手紙は、「キリストのしもべとして、心を広く開く」ということに尽きます。見方を変えれば、彼は言い訳がましく聞こえます。自己弁明をしているように聞こえ、自己推薦しているようにも聞こえます。けれども、信頼関係がある仲においてであれば、「ああそうなのか、パウロたちはこんなことを思いやって、こんなことをしてくれていたのだ。」ということが分かります。その弁明は、自慢しているのでも、自己弁護しているのでもなく、むしろキリストの愛がパウロたちから流れてきていて、それを自分が受けてきたのだ。今持っている霊的財産は、パウロたちの宣教の働きによるのだということが分かるのです。

「あなたがたに対する私たちの愛の心は、狭くなってはいません。」とパウロは言っています。自分が愛の行為をしているにも関わらず、相手がそれを愛と受けとめずかえって責めてくるようなことをしてくれば、普通は心が折れます。もう自分は心を開いて、その人に愛を示したくないと思います。心の戸を狭くして、内にあることを明かさないでおこうと思います。けれども、パウロはそうしませんでした。その心は大きく彼らに開いていました。それができたのは、彼がキリストのしもべだからでしょう。コリントの人たちを、自分の愛で愛したのではなく、キリストから流れる愛で愛したからです。自分とコリントの人たちを比べたのではなく、キリストがコリントの人たちを捉えてくださっている、彼らはキリストの御手の中にあるということ、受けとめられていたからに他なりません。

そして先ほど話したように、コリントの人たちは、パウロたちのほうが自分たちに対して心を狭くしていると思っていましたが、実は彼ら自身が心を窮屈にしていました。パウロは彼らに言いました。「1:24 私たちは、あなたがたの信仰を支配しようとする者ではなく、あなたがたの喜びのために協力して働く者です。あなたがたは信仰に堅く立っているのですから。」彼らは、パウロからいろいろな指示が与えられ、自分自身がその言葉で支配されていると感じていました。パウロたちが自分たちを支配しているのでは？と感じていました。いいえ、パウロは彼らの喜びのために、協力して働いている者です。信仰に堅く立っているならば、協力していると受け止めることができても、もし

信仰が揺らいでいるのであれば、その同じ言葉が自分を支配しようとしていると感じてしまいます。

そして、「私は子どもたちに語るように言います。」と言っています。自分を信仰による父、そして彼らを子どもにたとえています。父は自分の子を愛してやまず、この子のためなら何でもしたいと願っています。けれども、本人は父に心を開きません、なぜならお父さんは自分に酷いことをしている、と思っているからです。父は、愛を示すために最善のことをしているのに、それでも心を開こうとしません。むしろ誤解しています。なんでこんなことをするのか！と怒ります。ところが、後になって分かります。ええっ？そんなことをしてくれていたのか？と。

放蕩息子の話の兄息子のことを思い出します。父の寛大な心、その恵みを表した時に、本当なら喜ぶところが、彼は逆に怒ってしまいました。自分は父から弟に対するような愛を受けていないと感じたからです。けれども、父はなんと仰いましたか？「子よ、おまえはいつも私と一緒にいる。私のものは全部おまえのものだ。(ルカ 15:31)」いつも父は共にいてくれたのです。そして父のものは彼に全て与えていました。いかがでしょうか？心を狭くしているのは父ではなく、実は自分自身が狭くしてしまっているのです。キリストに仕えるとは、そういうことです。相手がキリストの愛を知るまでに、その過程で反発し、かえって心を閉ざすということもあるということです。それが愛の性質であり、人の心の姿でもあると言えるでしょう。

4A 世との調和 14-16

では、なぜ心を窮屈にしているのか？それを考えてみたいと思います。

14 不信者と、つり合わないくびきをともにしてはいけません。正義と不法に何の関わりがあるでしょう。光と闇に何の交わりがあるでしょう。15 キリストとベリアルに何の調和があるでしょう。信者と不信者が何を共有しているでしょう。16a 神の宮と偶像に何の一致があるでしょう。私たちは生ける神の宮なのです。

不信者との頸木を共にしているということ、これが問題でした。世と調和していくことが、知恵にかなっていると思っていたことでした。キリストの教会は、清純な花嫁のように世から引き離され、ただキリストのものとされている存在です。けれども、この世にある見方、価値観、人々が常識として持っている考え方、そういったものを混ぜ合わせてしまっているのが、神の恵みの働きを人間的な標準で判断してしまっているのです。私たちがしてはいけないことは、「世と仲良く付き合いながら、教会生活を歩む」ということです。そうではなく、「神が住まわれる宮」「キリストが頭であるところ」です。この方を標準として歩みます。ただこの方だけなのです。90 ✠キリストで、10 ✠自分の考え方を入れよう、ではないのです。ぜひ、父なる神の愛に触れてください。そのためには、キリストだけを自分の標準としてください。